

## 2 本論のまとめ

本論の研究によって以下のことが明らかになった。

近代学問としての日本民俗学は、その学問的関心は明治中期の土俗学に起源を持ち、民俗事象が人類社会の進化の「残存」であるという欧米人類学の学説に依拠していた。やがて日清、日露戦争を経てナシヨナリズムが高揚するにつれて、民俗事象は国民国家の民族生活や思想・信仰を理解する材料として重視されるようになった。

一九三〇年代初めに日本において民俗学の理論及び方法の体系を確立したのが柳田国男であった。その方法は日本を単一言語・民族の国家とし、郷土人によって各地から均質に収集した多数の民俗資料を分類し、「民俗語彙」によって索引を作り、各地に見られる地域差を時代差として理解し、国民全体としての生活、信仰の変遷を構成しようとするものであった。柳田は「世界民俗学」を主張しながら、具体的な経路を提示せず、実際「一国民俗学」の確立に力を注いでいった。

彼のもとで民俗学を学んだ直弟子は、木曜会として日本民俗学の研究、活動の組織的中核となり、初の全国規模の同時調査である山村調査、海村調査を行った。一九三五年に全国規模の民俗学組織・民間伝承の会が結成され、「一国民俗学」のもとで実践活動を展開していた。

一方、一九二八年に創刊された『旅と伝説』は『民族』以降、理論的模索を始めた柳田の活動を支え、また柳田の大きな影響と支持のもとで、『民間伝承』発刊まで民俗学運動の最大な発信地として活躍し、その後も独自の立場で日本民俗学の重要な一翼を担っていた。中央の民俗誌として『旅と伝説』と『民間伝承』はそれぞれ特色が違うが、ともに一九三九年を境に中国関係の記事が急激に増えていた。そうした傾向は地方民俗誌でありながら、地方を超える視野をもつ『ひだびと』においても確認できる。これは日中戦争が長期戦に突入した段階において政府

主導による中国調査の大規模な展開と時期を同じくするが、それに影響された結果ではなく、むしろ両方とも大きな時代の要請によるものであった。

この時期、柳田を中心とする日本民俗学の中心部には、民俗学の時局への寄与の可能性や国外への言及が増えたものの、日本国内に実践の場を限定する「一国民俗学」の枠は守られていたといえる。

しかし、日本の民俗学者は記者、軍人、調査員、学者、教育者など様々な身分の下で中国に赴いていった。中国に長期にわたって滞在し、中国に関連する調査研究やその他の活動を続けており、しかも日本国内との交流に力を入れた者として、戦前戦後民俗学の組織的發展に重要な役割を果たした者が目立つ。本論で取り上げた太田陸郎、大間知篤三、直江広治はそうした人々である。

三人はともに直接柳田国男の指導を受けた者であるが、中国との関わり方に関しては、各自の経歴や置かれた環境によってそれぞれ特徴を持っている。

太田陸郎は郷里の生活の細心な観察者であり、郷土史料の熱心な蒐集者でもあった。彼は県庁に勤めながら地元で郷土史の研究をめざし、『兵庫県民俗資料』という価値の高い地方民俗雑誌を主宰していたが、柳田の要請で東京以外の日本民俗学の第二の中心を作るべく、『近畿民俗』の編輯や近畿民俗学会の活動に積極的に携わり、日本民俗学の地方リーダーとして活躍した。武漢作戦のため中国に赴いた後、長く故郷と風土が近似する揚子江流域に滞在しており、最初から行軍地や滞在地の農村生活を細心に観察し、中国と日本の農業の近似と漁業の相異を文化交流史的に解明する着想を持つようになった。

大間知篤三は学生社会運動組織である新人会の重要成員で、共産黨員でもあった。転向者のための大孝塾研究所（のち国民思想研究所）に籍を置きながら一九三〇年代の前半から柳田のもとで民俗学に専念した。彼は『民間伝承』の編集や、山村・海村調査で活躍し、中央での講習会や地方の講演などの民俗学普及活動にも積極的に参加していた。関東軍の参謀の任にあった辻正信の推薦で、満洲建国大学に赴任した後、多民族環境の満洲においては民俗学

が民族学に含まれるべきだと主張するようになった。満洲での大間知の学的関心はもっぱら少数民族、とりわけ満洲の原住民とされる満洲族、そして満洲国内を主なる住居地とするダウール族などに向けられていたが、その精力的な調査研究活動の裏に日本人指導のもとでの満洲民族の統合という政治的な視線があった。

直江広治は、盧溝橋事変の衝撃で東洋史に進学し、大学在学中に木曜会の会合に参加し、柳田の指導のもとで民俗学の訓練を受けた。大学卒業後、志望で北京の日本中学校に赴任した。そこで日本人による現地の民俗研究団体民風会に参加し、当時華北地域で展開されていた満鉄の農村慣行調査に便乗する形で調査を展開していた。そして彼は民俗学者として資源研究所の山西学術調査団に参加し、日本民俗学と関連を有するドイツ系教会大学輔仁大学の日本言語文学部の新設に伴い講師として赴任した。大学で彼は日本民俗学を講義し、『昔話採集手帖』の翻訳に手をかけ、日本民俗学の教育普及に尽力しながら、ドイツ民族学の系譜を引く同大学付属の東方人類学博物館の活動にも積極的に関与した。

以上のように、三人の中国経験は互いに違うが、日本民俗学と中国との関わりにおいて重要な役割を果たしたことは共通している。

太田陸郎の役割は「現地レポーター」に譬えられよう。彼は中国に赴いた者の中で、民俗学的視線による観察文をいち早く日本国内の民俗学界に発信した人物であり、『民間伝承』や『旅と伝説』の積極的な寄稿者でもある。その文章は雑誌の編集者や木曜会の中心メンバーらによってたびたび紹介され、また南方熊楠のような民俗学の重鎮に取り上げられていた。そうしたレポートとコメントのやり取りは、頻繁に当時民俗学の最も重要な中央雑誌に登場し、中国においても日本人学者による民俗学の研究ができるというイメージを日本民俗学に与えた存在として大きな影響力を持っていた。

木曜会中心メンバーの守随一に次いで大間知篤三が満洲に赴いたことは、重要人物が二人も行っているという意味で、日本民俗学における満洲の存在感を高めたと言える。彼はまた『民間伝承』に多くの通信を寄せており、帰

国する機会を利用して中国での研究の一斑を木曜会で発表していたが、日本民俗学とって彼は「現地組織者」であった。新京民俗同好会、そして、満洲民族学会において指導的な地位に立ち、積極的な活動を展開する大間知は、満洲における日本民俗学の地位の向上、及び現地での民間伝承の会の会員獲得に尽力し、大きな成果を収めた。

直江広治は「現地エージェント」的な存在であった。滞在する北京において民風会、輔仁大学、東方民俗研究会などの活動に積極的に関与し、満鉄調査部の山本斌、東方文化総委員会の橋川時雄、輔仁大学東方人類学博物館のエーデル、華北総署督弁、華北総合調査研究所副理事長の周作人など多様な人物と接点を持ち、日本民俗学の影響拡大に努め、また柳田や橋浦と密接に連絡を保っていた。

この三人の活動は、柳田国男古稀記念会事業の構想上重要な役割を果たすことになる。柳田の古稀をきっかけとして、日本民俗学の新しい発展を意図する記念事業が木曜会の中心メンバーによって企画された。内地各地における民俗学大会と並んで大間知の活動によって数多くの民間伝承の会会員を有する新京が、まず内地以外の民俗学大会の候補地として提案された。そして直江が活躍する北京や、民俗学研究雑誌、団体をもつ植民地台湾、朝鮮、それに蒙古などの地域の中心地に、東京から講師を派遣し、当地の研究団体と提携する民俗学大会の計画が立てられた。講演会とイメージされていた国外民俗学大会はやがて「国際共同研究課題」の発表によって、共同研究の場となり、一九四二年以降周辺地域との「比較」という視線が強くなるにつれて、それはまた「比較民俗学」の実践を試みる場にもなるはずであった。これは同じ時期に高まっていた日本民俗学再編成の気運と軌を一にして、日本民俗学にしてその組織を東アジアまで拡大する構想を持たせたのである。とくに直江の積極的な活動によって北京では開催のための準備をすべて整えていたが、個人の事情で延期になり、さらに戦局の変化によって実行不可能となった。